

---

# 告白は激闘だ。

にーとん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

告白は激闘だ。

### 【Nコード】

N2324F

### 【作者名】

にーとん

### 【あらすじ】

告白する人、される人。いつもその傍らにいるような、仲人が主人公の物語。

## 第一話。

「マジで頼むよ！ほんとに！お願いします！！」

「えゝ、どうしようかゝ。」

焦らしまくりますよ、僕の名前は白石秋斗<sup>しらいしあきと</sup>です。

「頼むってばゝ！」

「しょうがないですねえ。じゃあ、今から言うものを買ってきてください」

「へい！」

「メモ帳、筆記用具、カメラ、小型録音機・・・」

「うんうん・・・」

「あと、閃光玉。」

「閃光玉・・・って、んなもんあるか！！」

「だって、目くらましに必要なんですもん。」

「いや、無いもんは無いから。」

「あ、それがものを頼む人の態度ですか？素材玉と光虫を調合すれば・・・」

ちょっと話が危つい方向に向かってますね、著作権的に。

「だからさ。うう。．．．」

「今のは嘘として．．．じゃあ明日色々と持ってくるんで。」

「嘘ってどこまで？」

「なんも買わないで良いですよってことです。」

「良かったあ。」

「じゃあ、こっちから連絡するんで。」

（翌日）

どうも、白石秋斗です。

自己紹介二回目ですね。まあいいや。

僕は本当は春に生まれたんです。

なんで秋斗なんでしょう？

というわけで今、僕は鳥肌たつぞうさんに頼まれて建物の影に潜んでいるわけです。

あ、来ました！

【ねえねえ、笹川先輩のこと、どう思う？】

【かつこいいよね〜！】

【ね〜。】

相手は二人です。

え？ああ、これは、区別がつくようにかぎかつこの形を変えている  
そうです。

かぎかつこ？なんの話でしょうか・・・？

【でもさ、鳥原先輩もかつこいいよね〜。】

【そうかな〜？】

来ましたよ来ましたよ。ふふふ、伏兵です。

え？鳥原？ああ、鳥肌さんのことですね。

さんと言っても男です。あそこもたつぞうさんです。

下ネタすいません。とにかく、伏兵を忍ばせておいたのです。

え？あらすじが理解できない？しょうがないですね。

説明しましょう。

## 第一話（後書き）

初めまして。初めましてじゃない方はこんにちは。じゃなければこんばんは。

多分この先も一話一話が短いです。

更新も気が向いたらって感じです。

そんなんでも良ければ、最後までお付き合い願います。

## 第二話。

僕の名前は白石秋斗です。きっと親はひねくれものです。だって、僕は春に生まれたんですよ？

はい、それでは説明しましょう。

僕はいろんな人の情報を持っていることから情報屋と呼ばれるようになりました。

そして、いろんな人（女子も含む）と仲が良く、ストーキングスキルもあることから、人と人との仲を司る、人間関係の神とあがめられるようになったのです！

そして、鳥肌たつぞうさんに今日、言われたのです。

「俺と神野ちゃんを、カップル、もしくはそれ以上のいやーんな関係やあつはんうつふんな関係にしてくれ！頼む神様！」と。

いやーんとかあつはんうつふんとか気持ち悪いですよ。でもそういうことは僕に言うべきじゃないのです。本人に言うてください。

そして、快くその頼みを承った僕は一番仲の良い後輩の関野さんに伏兵を頼んだわけです。

まあ伏兵と言っても、神野さんに鳥肌さんのことをどう思っているか聞くだけですけどね。

そして、今に至るわけです。

【いや、鳥原先輩もかつこいいよ？】

【まあ、顔は良いけどね。】

ルックスは良しですか。実際、結構モテてたりするそうです。

性格を知らない人には。

【何か気に入らないところでもあるの？】

【あ、なんかさ、あんま接点ないからさ。分かんないわけよ。】

【性格とか？】

【そうそう。】

【趣味とか？】

【そうそう。】

【なるほどね。】

【なんでそこまで聞くの？】

【じゃあ、この質問に答えたら今の質問に答えるよ。】

【何さ。】



【ずばり！あなたの好きな人は？】

【いない。】

【つまんね〜。】

【うおい。】

いないんですか。

まあ、ライバルがいないとでも思っておきましょう。

## 第二話。（後書き）

こんにちは、こんばんは。にーとんです。

更新は遅いと断っておいたつもりなのですが、ブログにとっと更新しろよ。とのコメントが・・・

書きだめであつたのを投稿しました。

書きだめ残り一つ！次回の更新はもっと遅くなるかもですが、今後ともよろしく願います。

### 第三話。

【で？なんで聞いたのか言いなさいっ！】

【なんの話だっけ？】

おお！さすが関野さん。ボケが突っ込みどころ満載！

僕も精進せねば！！

あ、どうも。白石秋斗です。

え？そろそろ自己紹介しつこいですか？

いや、これは僕の癖なんですよ。小さい頃は影が薄かったんですよ。誰も名前で呼んでくれないから母さんに相談したら、会っ度に自己紹介しなさい、と言われたのです。おもしろい母親です。ははは。

【その妙に間延びした話し方はやめなさいっ！】

突っ込むところですか。

【じゃあ神野ちゃんはそのツンデレみたいな話し方をやめなさい。】

【ばれてたか。】

【私は神野ちゃんのことならお見通しよ、ふふふふ．．．ごふおあっ！？】

おお！神野さんのツッコミだ！

関野さんが飛んでいった！

さすが神野さん、そのツッコミは岩をも砕く！

あ、関野さんが立ち上がった。

さすが関野さん。その身体の丈夫さは異常！

僕も精進せねば……！

【ふふふ。甘いわ。神野ちゃん。愛の拷問タイムはまだまだ続くのよ。】

キャラが壊れてますよ。

【それは違うわ！見なさい！あれが私の家よ！】

神野さんもノリ良いですね。

ささつと住所を見る僕。こつ見えてもぬかりはありません。

【くっ！じゃあ続きは電話よ！】

【そこまで知りたいなら教えてあげましょう。

03-3333（以下個人情報流出防止のため省略）よ！】

関野さんもなんかちゃっかりしてるというか・・・自然な流れで電話番号聞き出してくれるなんて。めもめも。

しかし神野さんも流されやすいんですね。

関野さんと神野さんの話し合い（格闘？）が終わり、僕は関野さんと合流しました。

「関野さん、ありがとうございます。」

「いえいえ、この位お安い御用ですよ。」

「ところで関野さん、」

「何ですか？」

「僕のお手伝い役になってもらえませんか？」

「相棒ですか？」

「いいえ、子分です。僕は女子から秘密を聞き出せるほどフレンドリーなオーラは出してませんから。」

「子分というのは気に入りませんが、まあいいですよ。」

「ホントですか？」

「うん。私も最近暇ですから。ぜんぜんおーけーですよ。」

「ありがとうございます。」

実は今日のあの会話を見ていてこれは．．．！！と思ったんですよ。

関野さんと神野さんはもともとあまりしゃべらなかつたらしいんですが、あんなに仲良くなっているところを見るとやはりそれなりの何かがあるはず。

「じゃあ早速お願いが．．．」

「はい、何ですか？」

「笹川さんと神野さんはどういう関係か調べて貰えますか？神野さんが好意をいだいている以上無視できない人物ですから。」

「分かりました。」

おお、なんか一気にボスになった感じがですね。

大丈夫、子分をいじめたりしませんから。

ちゃんとかわいがりますよ。

### 第三話。(後書き)

どうも、にーとんです。

秋斗君の自己紹介にはこんな理由がありました(笑)

これからも毎回自己紹介させます。

名前、覚えてあげて下さい!!

#### 第四話。

こんにちは。 え？こんばんはですか？

こっちの世界は昼だからこんにちはです。

どうも、白石秋斗です。

こっちの世界って何ですかね。

あっちの世界なんてあるんでしょうか。 まあいいや。

今日、僕は関野さんに会って新たな情報を聞くところです。

駅前で待ち合わせということで・・・あの人は時間にルーズだということが分かりました。

「遅いですね・・・」

もう待ち合わせの時間から二十分ほどたっています。

ぼーっとしていると前方より超ダッシュしてくる女の子を見つけました。

・・・これ、止まりませんね。

そう確信した瞬間、脳を回転し始めます。

僕の後ろには電信柱・・・ここで避けたら鬼畜の出来上がりですね。



というわけで、

・ ・ ・ 避けました。

「いったああああいいいいいい！！！！」

「関野さん、二十分の遅刻です。」

「いやいやいやいや、受け止めるべき、今のは受け止めるべきだった！！！」

「だから、二十分遅刻です。」

「だからじゃなくて、今のはやんわりと受け止めるべきだった！なんで！なんでひょいと避けるんですか！」

「いや、あの神野さんのつつこみに微動だにしなかったじゃないで

すか。」

「いや、吹っ飛びましたよ一応！？ていうかなんですか？あなたは鬼畜ですかああああ！」

「そうです。」

「そうです。じゃないですよ、女の子は顔に傷をつくっちゃいけないですよ！」

「そうですかYO！」

「YOじゃなくて！」

面白いですね．．．少しSとして目覚めちゃったかもです。

「関野さんのせいでSになっちゃいました。」

「なるなああああー！」

関野さんが落ち着いたのでどこかの店のドリンクバーだけで何時間も過ごすという超迷惑なことをすることにしました。

「うつ．．．痛いですよー、死ぬう．．．死ぬう．．．」

「その位で死ねるならたいしたもんですよ。」

「痛いよー、白石さんのばかぁ・・・」

すこし拗ねる関野さん。

・・・かわいいかも。

「関野さん、昨日どうなったんですか？」

仕事の話になると彼女なりのけじめか、シャキッとしてこう言いました。

「全然駄目でした。」

「なるほど。」

やっぱり何か技を覚えておくべきだったのか・・・

「ひとつ分かったのは笹川先輩は年上好きということです。」

「そうですか・・・」

そしたら何もいい情報は手に入らなかったんですね・・・

「って、それすごくいい情報ですけど!？」

「え?だって笹川先輩の趣味が分かったところで何も・・・」

関野さんは頭が弱いようです!

「だから、笹川さんが年上好きなら年下の神野さんを好きになるこ

「とはないでしょう?」

「?・・・あ、あああああ!!なるほど!!」

「・・・本当に分かったんですか?」

「分かりました!分かりましたよ!さすが私!いい情報を手に入れた!!」

「えらい偉い。」

「というわけで予想以上の情報ゲットです!

「でも、どこでそんな情報を?」

「それがですね・・・」

#### 第四話。(後書き)

おはようございます、にーとんです。

秋斗君は鬼畜なのです。

今後ともよろしくおねがいます。

## 第五話。

こんにちは。

このあいだSになった白石秋斗と申します。

僕はココアを飲みながら今後の中学校生活においてどのような・・・

「白石さん、聞いてますかー?」

「え?聞いてますよ?聞いてます!」

「なに狼狽してんですか」

「で、なんでしたっけ?」

「ですからあ・・・」

僕は飲み干してしまったココアのカップに次の飲み物を注ぐべく、席を立ち・・・

「なんで聞いておきながら飲み物をとりに行こうとしてんですか!」  
「?」

「だって僕Sですから。」

「だからSになるなああああ!」

面白いなあ。

「分かりましたよ。つまり笹川さんが友達と話しているのを盗み聞きしたんですね。」

「．．．」

「どうしたんですか、ぼかんとして。」

「話を聞いていないと思っていたのに．．．」

「そりゃあ僕は十人の声も聞き分ける豊聡耳（聖徳太子のあれ、とよとみみ」と読む。）の使い手ですから。」

「使い手！？」

「まあそんなことどうでもいいんです。」

「いや前回、どこでそんな情報を？って言ってましたよ！？」

「前回とか言っちゃだめですよ、この世界の住人として！」

「で、どうでもいいからなんなんですか？」

「はあ．．．いいですか？僕らの最終目的は鳥肌さんと神野さんをカップル、もしくはそれ以上のいやーんな関係やあっはんうっふんな関係にすることです。」

「カップルは分かるけどその後ののはなんですか。」

「本人に言うてください。」

「ていうか、鳥肌さんて・・・」

「で、そのためにはまず神野さんが鳥肌さんのことを好きにならなくてはいけません。」

「軽くスルーしましたね。」

「そのために僕らは作戦を練るべくここにいるのです。」

「無視ですか。そうですか。」

「で、関野さん、何かいい方法はありますか？」

「そうですね・・・洗脳ができればいいと思います。」

「というわけで今回は鳥肌さんのおっところまえ！なところを見せることにしました。」

「おっところまえ！なところってどんなところですか」

「それは禁則事項です。」

「禁則事項にしてどうするんですか」

「とにかく、八月二十四日！この日は何の日か分かりますか？」

「八月二十四日・・・北京オリンピックが閉幕した日ですね！」

「そんなこと言ったらだめです！時間軸が狂っちゃうから！！」



「時間軸が狂うとか言っちゃだめですよ、この世界の住人として！大丈夫ですよ、みんなが生きている時代の一年後ってことにすれば！」

「みんなってなんですか！とにかく八月二十四日、この日は祭りの日です。」

これだけ言つと関野さんは全てを理解し、大きく頷きました。

「なるほど、そういうことですか。」

「そういうことです。」

「私たちは変装とかしないでいいんですか？」

「いいですか、尾行すると言つと黒いメガネをかけて相手の後ろでこそそそとやってるイメージがありますが・・・」

「黒いメガネってサングラスじゃないんですか」

「そんなことをやったら逆に目立つだけです。」

「またスルーですか、スルー多いですね」

「僕らは誰にも怪しまれないようにカップルのふりをして鳥肌さん、神野さんに近づきます。」

「・・・カップル？ちょ、ちょっと待った！あいや待たれい！なんですか、私たちは腕くんだり焼きそばを同じ箸でたべたり

ましてやお互いのかき氷を混ぜて変な色にしくちやいけないんですか？」

「いや、一番最後のはいらなと思いますけど。嫌ですか？」

「いやいやいや、いくら白石さんでも腕を組むのは恥ずかしいですよ。」

「そんなに僕のことを嫌いですか・・・」

「言つてませんよ!？」

僕はおおきくためいきをつきました。

しょうがないですね、この手段を使うしかなさそうです。

## 第六話。

「関野さん、僕の情報収集能力、なめてもらっちゃ困りますよ?」

どうも、白石秋斗です。今関野さんを脅迫するところです。

おお、物騒だ。

「ど．．．どういことですか．．．」

む．．．相手側も慎重に出ましたね。しかし予想通りです。

「ということを逆手にとれば．．．僕のいったことはほとんどのみんが信じることになるんですよ?」

「．．．っ!．．．と、推理小説のような反応をしてみました在意味が全く分かりません。」

「やっぱり頭悪いですね。」

「む．．．」

「まあはつきり言ってそんなこそこそやる必要はないんですけどね。」

「え?」

「むしろあの二人が一緒に屋台巡るなんていくらなんでも一気に仲良くなりすぎじゃないですか?」

「確かに。」

「というわけで僕たち四人で屋台巡りをすればいいんですよ」

「・・・心配して損した。」

「ところで、今回の場合でもただ一緒にについて行けば良いってものじゃないんですよ？」

「いろいろとそそのかせばいいんですか？」

「そういうことです。さすが関野さん、分かっていますね。」

「そりゃあそうですね。さすが私。」

僕は関野さんが胸を張って自慢話を始めたのでその間に

1・ココアを一気飲み

2・トイレに行く

3・キャラメルマキアートをカップに注ぐ

4・キャラメルマキアート一気飲み

という一連の動作をして席に戻りました。

キャラメルマキアートは立ち飲みしました。行儀が悪いですね。

「と言っわけですよ。」

「そんな自慢話はおいとして、今日はそろそろ帰りましょうか？」

「えー、またそうやって私を墮落させる気ですか？」

「なんでそうなるんですか、運動しなさい、運動を。ところで作者は最近全く体を」

「それ以上は言っちゃだめ！なんかこの世界が崩壊する気がするから！」

「じゃあ帰りましょう！」

「分かりました！」

く店を出てから

「最後なんであんなにハイテンションだったんですか？」

「僕に聞かないでください、むしろ僕が聞きたいほです。」

「それじゃあ、これにて失礼します。」

「それではまた来週。」

さて、家に帰ったらいろいろと準備しなくちゃですね。

く帰宅後

「ただいま。」

「おかえり兄貴。」

「兄貴とか言っちゃだめって言っているでしょう？ほら、どっかのガチムチと勘違いされちゃったじゃないですか」

「何言ってるんの兄貴」

「さてみんなに質問です、この子は男でしょうか、女でしょうか。」

「女だばかりー」

「こふっ！」

さすが我が妹、しかし今のハイキックであなたのパンツの色はバレバレですよ？

「変態。」

「げふっ！いつもの白石ジョークじゃないですか。てかなんで口に出してないのにツッコミをいれるんですか。」

「白石ジョークって何だよ。だいたい、口に出してるから。」

「なあああにいいいい？！やつちまったなあ！？」

「兄貴が狂った。」

いつものやりとりをすませてから自分の部屋に戻ります。

え？キャラが壊れているって？

嫌ですね、これは伏線ですよ、ちゃんと覚えておいた方がいいですよ。

でも作者、伏線張るのは良いけど忘れることが多いんですよね。

嘘です、今のは聞かなかったことにしておいてくださいお願いします。

しょうがないですね、説明しますよ。

## 第六話 (後書き)

このごろ小説更新が遅くてすいません。

そして．．．こういうのを言うのもなんですが、小説評価・感想を書いてほしい。ほんとに。

ブログにも来てくれ。

それじゃあ頼んだよ。



## 第七話。

こんばんは、白石秋斗です。

うちの家族編成について説明しましょう。

父（仕事の都合により居ない）、母（なぜか最近姿を見ない）、自分、妹の四人家族です。

母親については聞かないでください。

まあ要するに今は妹と二人暮らし。

あの娘はああ見えて結構寂しがりやなので僕がああやって元気づけているのです。

「兄貴は優しいな。」

「・・・なんでそうやって僕の思考回路を読み取るんですか。」

「技だ。」

「そうですか。」

「晩ご飯の用意ができたから席に着いてくれ。」

「分かりました。」

促されるままに席に着きました。

「おいしそうですね。」

「おいしそうじゃない、おいしいんだ。」

「いただきます。」

僕がご飯を食べすんでいると妹がなぜか食べないでじっとこちらを見ている。

「ご飯つくるの、うまくなりましたね。」

「・・・ありがとう。」

「いえいえ、ありがとうを言うのはこっちですよ。いつもおいしいご飯をありがとうございます。」

「別に・・・」

「お残しは許しまへんでー!-!」

「今なんか聞こえたような。」

「そこは無視すべきだろ。」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「あ、そくだ・・・今度のお祭りで屋台巡り、やらないか?」

「．．．変なネタはもう良くないか？」

「それはともかく、祭りに行かないか？」

「まあ．．．いいけど．．．他に人は誘っているのか？」

「誘っていたら嫌なのか？」

「．．．兄貴、私で遊んでいないか？」

「そういうあなたも僕で遊んでいないか？」

「気のせいじゃないか？」

「そうなのか？」

「．．．兄貴、敬語じゃないとキモ．．．くないか？」

「やっぱりそうですか？」

「うん．．．それが兄貴らしい．．．くないか？」

「まあど「そのホモさんは置いといて．．．」

「あ、せっかくの暗黙の了解が．．．」

「どうするんですか？」

「まあ．．．イクよ．．．」

「なんで変にカタカナを使うんですか。」

「なんか家の中はオールウェイズオタクモードだな。」

「そういうことを言っちゃイケません。」

「だめだこいつ・・・早くなんとかしないと・・・」

「とにかく。来週の八月二十四日、来てくれるかな？」

「いいとも！・・・やっと一般ピーポーでも理解できるネタだな。」

「・・・そうですね。・・・それでは、ごちそうさまです。」

「御愁傷様でした。」

「それを言うならお粗末様でした、ですよ。」

「・・・御愁傷様でした。」

「・・・もういいです。」

「ところでそろそろ名前で呼んでくれないか。なんで何か考えているときでも『妹』なんだよ」

「なんて呼びましょう？」

メイドロボ一号

俺の嫁

凜<sup>りん</sup>

「メイドロボ一号……」

「誰が！」

メイドロボ一号

俺の嫁

凜<sup>りん</sup>

「俺の嫁……」

「え……兄貴……正気か？別に……嫌とは言わないが……  
じゃなくて！」

メイドロボ一号

俺の嫁

凜<sup>りん</sup>

「凜……」

「最初からそう呼べば良かったじゃないか。さっきのなんだよ」

「いくらか選択肢をもつけてみました。」

「? . . . なんだそれ。」

そんな感じで白石家の夜は更けていく . . .

## 第七話。(後書き)

ええと、見ての通りネット小説ランキングに登録してみました。  
気軽にぽちっと！

いや、哀れみのぽちっとはいらなそうですよ？

## 第八話。　　夏祭り編

こんにちは、白石秋斗です。

さあ、今日は待ちに待った八月二十四日ですよー!!

「兄貴、人ごみ嫌いだ。」

「いや、そんなこと言われても・・・」

「はぐれないように手をつないでくれ。」

「・・・いいですよ。」

「勘違いしないでよ？べ、別にあんたがはぐれないようにしてあげてるだけなんだからね?!」

「・・・どうでもいいですよもう。」

「そこはノるべきだろ。」

「いや、僕には今回重要な任務がある故、ふざけてはいられないんですよ。」

「そうか。私に何か手伝えることがあったら言ってくれ。」

「分かりました。」

「白石さん!!」



「お、来ました。」

「よお秋斗。今日はよろしく頼むぞ。」

「こんばんは。白石先輩、鳥原先輩、関野ちゃん。」

「兄貴、どれが誰だか分からないぞ。」

「じゃあかぎかつこの前に名字の一字めを置いておきましょう。」

鳥「何の話だよ？」

白「いや、何でもありません。」

関「あ、名字の一字めだ〜」

神「？・・・名字の一字め？かぎかつこ？」

凜「私だけ名前なのだが？」

白「かぶつちやいますからね。」

凜「まあいいか。それは私が特別な存在だからです。なんてな。」

神「鳥原先輩。私たちだけなんか置いていかれてる気がします。」

鳥「同感だ。」

凜「ところで私は皆とは初見なのだが？」

白「ああ、そうですね。紹介します、この娘はメイドロボ一号・・・」

凜「まだそのネタをひきづっているのか。」

関「じゃあメイドちゃんでもいいかな？」

凜「いや、良くないと思うが・・・」

白「敬語を使いなさい、敬語を。」

凜「いや、兄貴と居るとついいつもの癖だな。」

白「改めまして、この娘は僕の妹の凜です。」

神「凜ちゃんよろしく。」

凜「ああ、よろしく。」

鳥「なあ、秋斗。少し耳貸してくれ。」

白「レンタル料3000円です。」

鳥「そういう意味じゃねえよ、だいたい高すぎるから!」

白「はいはい、何ですか?」

鳥「凜ちゃんって今いくつだ?かわいくないか?(小声)」

凜「私は今小学6年だぞ？11歳だ。」

白「ちなみに凜は俺の嫁だから渡しません。」

鳥「秋斗、お前が俺とか言うときもいぞ。だいたい、なんで凜ちゃんにまで聞こえているんだよ？」

凜「技だ。」

白「読心術の使い手でございます。」

鳥「・・・じゃあ何考えてるのか分かつちゃうわけか？怖えよ。」

白「今の状態をRPG風にすると、『読心術ができるようになった！』って感じですね」

凜「いや、意味が分からないぞ。」

神「私たちも話に混ぜてくださいよ。」

関「同感です。」

白「いや、関野さんには分かるネタがあると思うけど神野さんはちよっと・・・（ほら、鳥肌さん、神野さんの相手をしておいてください。）」

鳥「神野ちゃん、なんか食いたい物あるか？」

神「あ・・・それじゃあ・・・」

凜「二人とも行ってしまったぞ？いいのか兄貴？」

白「いや、これが狙いですからね。」

凜「・・・なるほどな。なんとなく今回の屋台巡りの真意が分かってきた。」

白「じゃあ、追いますよ？」

凜「分かった。」

関「らじゃ！」

追いついた僕たちはそこで衝撃の事実を！

凜「見てもいないし、知りもしない。」

白「その通りです。」

## 第九話　く夏祭り編

こんばんは、白石秋斗です。

いま神野さんが面白いです。

神「鳥原よ。シモベよ。私はあれが欲しいのです。」

関「神野ちゃんってなんか毎回キャラ違うよね」

凜「作者の中でもキャラが確定していないんだからしょうがないと思うぞ。」

白「よくそなんで初連載小説を書こうとしましたよね。」

凜「もう作者もテストで大変だからな。今回ははっちゃけるっていう話だぞ。」

鳥「うう．．．財布の中身が．．．俺の全財産が．．．」

神「どうしたんですか鳥原先輩!？」

鳥「なんなのいったい．．．」

先生「多重人格だとおオオオオオオオオ!？」

関、神「．．．．．先生!」

先生「す、すまない、叫ぶなどか言いながら自分で叫ぶなど．．．

教師としていけないことだ．．．」

白、鳥「．．．先生だ．．．」

白「凜、あれですよあれ．．．」

凜「あれ？ああ．．．でもなんで今．．．」

白「いいからいいから．．．わー、こんなに人が多いと僕迷っちゃうな。凜、手つないでよ。」

凜「別に良いけど．．．．．か、勘違いしないでよね!？」

先生「ツンデレだとオオオオオオオオオオオオオオ!？」

一同「面白い．．．．．」

凜「あ．．．．．」

凜が何かおもいついたような顔をしました。

そして右手の人差し指をあごに当ててこんなことを言いやがりました。

凜「新ジャンル先生萌え。」

関「何を言い出すメイドちゃん。」

先生「メイドだとおオオオオオオオオ!？」

一同「・・・帰ろうか」

先生「すまなかった、先生が悪かったアアア!!」

鳥「しかし、先生こんなところで何してんすか？」

先生「いやあ、タバコを吸う奴がこういう時によくいるからな。見回りってやつだ。」

白「なるほど。でもその先生がみんなに変な目で見られてますよ?」

先生は変なことを叫びまくったせいで周りから変人扱いされていることに気づいていなかったそうで・・・

先生「・・・うう、そうやって、そうやって先生をいじめるのかあ・・・いじめかつこわるいよ?・・・」

先生が哀れに見えてきました。というか哀れそのものです。

凜「先生。そんなこと言っていないで、一緒に屋台巡りでもしようではないか?」

先生「う・・・君は優しいな・・・確か、授業参観のときに白石君を憧れの目で見ていた娘だな?」

白「凜・・・」

凜「違うぞ!?そう、あれは兄貴が答えを書かされているから間違いを書いていないかはらはらしていただけだ!」

白「そういえば『俺の嫁』って言ったときも『ああ、大歓迎だ。と  
いうか兄貴が私の嫁だ。』とか言っていましたよね？」

凜「記憶を捏造<sup>ねつぞう</sup>するな！」

関「違いますよ、メイドちゃんは、『兄貴の嫁！？そんなんじゃないんだから・・・』って言ったんだよ!!」

凜「関野さんはその場にいなかっただろう!？」

先生「ツンデ」白「うるさいです。」

先生「うう・・・いじめかっこわるいよ?」

そういながらこの意味不明な先生は人差し指で地面に円を描き始めました。

ぐるぐるぐるぐるぐる・・・

ぐるぐる・・・

ぐる・・・

凜「先生、萌え心をつかんでいるな!」

鳥「何の話だよ!」



## 第九話　く夏祭り編（後書き）

一言。

すみませんでした。

テストのせいで小説書く暇がありませんでした。  
またがんばります、よろしく願いします！

## 第十話。く夏祭り編

凜「結局先生置いてきたんだが・・・いいのか？」

白「先生は消えました。でも誰も気にしない。」

僕も気にしない、白石秋斗です。

凜「先生・・・かわいそうだな・・・」

神「し、白石先輩！」

白「なんですか？」

神「大変です、鳥原先輩が!!」

白「ああ、なるほど。」

凜「なるほどな。」

神「そうなんですようしましょう・・・って私何も話してないですよ?」

凜「読心術だ。」

白「読心術です。」

神「なんなんですかあなたたち!?!」

白「白石事件簿No.18〈消えた鳥肌〉」

神「変なネーミングしないでいいから探しましょう!」

ああ、あわれな神野さん。

すっかり僕らの策略にはまったそうですね。

関「私のこと忘れてません?」

白「忘れてませんよ。」

関「だって私会話にはいつてなかった...」

白「まあまあ、そのうち関野さんにも見せ場があるんですから。」

関「まあそうですね...」

おっと、話している間に神野さんが走っていきます。

白「神野さん、手分けして探しましょう。」

神「...それもそうですね。」

白「じゃあ僕と凜はこっち、神野さんと関野さんは名字の最後に『野』がつくグループとしてむこうを捜してください。」

関「なんかいらない説明文がはいつてましたよね?」

白「気にしない気にしない。ではまた後で!」

二手に分かれました。さあ、関野さん、ここから出番ですよ！！

凜「で？言われるままに芝居をしていたんだがなんだったんだ？」

白「ああ、言ってませんでしたね。説明すると・・・」

鳥肌さんが神野さんの目を盗みその場から消えて、神野さんはそれを捜そうとします。

凜「捜そうとしなかったらどうするつもりだったんだ？」

白「鳥肌さんは見つけてもらえず放置ですね。」

凜「・・・」

そして僕が二手に分かれて捜すことを提案します。

凜「ああ、そしてこの後どうするんだ？」

関野さんが神野さんの目を盗み、その場から消えます。

凜「ああ、分かった気がするぞ。その後一人でそわそわし始めた神野さんを取りがらさんが後ろから襲うんだろ？」

白「・・・ダシとるんですか、とりがらさんって・・・」

凜「そういうことだ、H A H A H A H A !」

白「何笑ってんですか凜？」

凜「で？私の推測はあっているだろう？」

白「．．．．襲ってどうするんですか全く．．．」

凜「いつもの白石ジョークじゃないか兄貴。」

白「まあそうですね。」

そして一人でそわそわし始めた神野さんを僕たち二人で．．

凜「おお！集団か！？集団なのか！？」

白「大声で変なことを言うんじゃないやありません！！」

凜「．．．」

．．．．．一人でそわそわし始めた神野さんを僕たち二人で．．

凜「集団なのかああああ！？」

白「少し黙ってなさい妹よ！」

凜「分かっている。一人でそわそわし始めた神野さんを私たち二人、顔を見せないようにしてどこかひと気の無いところに連れて行き、そこをとりがらさんが助けるんだろ？」

白「まあ．．．そうですね．．．」

凜「襲っているじゃないか。集団で。」

白「確かにそうですね・・・」

少しこの作戦が嫌になってきました・・・

## 第十話。く夏祭り編（後書き）

どうもにーとんです。

少し前を見直してみると、

．．．あ、最近秋斗君自己紹介してない。ということに気付きました。

前の部分も修正しておきました一応。  
それでは。

## 第十一話。く夏祭り編

白「作戦実行！突撃です！」

凜「おお、兄貴が熱くなっている！」

白「行きますよ！」

ふふふ、屋台で買ったお面をかぶり神野さんへ突撃です！

．．．本当に襲ってますねこれ。

どういう意味かはあなたにお任せします。白石秋斗です。

凜「確保才才才才才！」

．．．先生の叫びがうつつたみたいです。

凜が神野さんを後ろから羽交い締めにしました。

が、しかし、

神「へ？いや、きゃあああああああああああああああ  
あ！」

肘鉄を喰らわし、間合いを取り、

右パンチ左パンチ。



凜が飛んでいきます。

つてええええ！？

驚いて凜に駆け寄ります。

神野さんは逃げていったようなのでお面はとりました。

白「ちょ．．．大丈夫ですか？」

凜「ああ、少し油断してたようだ。」

白「いったん退きましよう。」

凜「了解。」

．．．．．

白「ふう、ここまでくれば大丈夫でしょう。」

凜「しかし、あのか弱そうな神野さんがなぜあんな力を．．．」

なんかバトルマンガっぽい展開になってますがこれはコメディですよ！

おっと、これ以上は言っちゃいけない気がしますね。

白「うゝん．．．」

神野さんのあの巨大な力の源について考えていると、何かを思い出

しました。

白「あ．．．．」

凜「どうした兄貴、なんか分かったか？」

そう、それは単なる笑い事として見ていたこと。

関野さんが秘密を聞き出そうとしていたときの神野さんのつつこみ。

白「まさか．．．」

そして、単なる叫びですまされていたこと。

神野さんの性格の変わり方。

白「多重人格だとオオオオオオオオオオオオ！」

凜「え？」

ひらめきました！

白「これです！神野さんは性格が変わることにより人並み以上の力を持つことができるのです！」

凜「なんかファンタジー展開きたな。」

白「これぞ怪人多重面相．．．．」

凜「それ違う。絶対違う。」

白「とにかく！今回の作戦は失敗です。」

凜「まじか・・・」

白「予想外ですね・・・」

関「あれ？なんで二人ともここに居るの？私の働きの無意味だったの？」

関野さんが来ました。

なんだか申し訳ない気になります。

白「・・・すみません。」

関「え・・・いや、謝らないください。白石さんは別に悪いことしてないですよ？多分。」

白「えーと・・・今回の作戦は失敗に終わりました。」

関「やっぱり？そんな気はしたんですよね。」

白「あの人怪力ですよ・・・」

関「そうですね、確かに。」

凜「それで私が吹っ飛ばされたと。」

関「それは大変・・・あれ・・・」

関野さんは驚いたような顔をするところ言いました。

関「メイドちゃん怪我してる!」

凜「あれ? 本当だ。教えてくれてありがとう関野さん。」

関「白石さん!」

関野さんはこっちを見て叫びました。

白「は、はい?」

関野さん怖い。

顔怖い。

関「妹さんに付き合わせといて怪我させて・・・兄失格ですよ?」

白「え・・・・・・・・」

凜「いいんだ、私が行きたいと言っただから。」

関「いいえ、白石さん、妹さんまで巻き込むことは無かったんじゃないですか?」

凜「だから、良いと言っているだろう? それより、そんなに怒っている顔の怖いバツになるぞ?」

関「なりません! とにかく白石さん、謝った方が良いんじゃないで

すか？」

白「．．．確かにそうですね、すみません。」

凜「いや。良いんだ。そんなことを言われると私も嫌な気分になる。

」

白「．．．凜は．．．優しいんですね．．．」

凜はふっと笑ってこう言いました。

凜「兄貴に似たんだよ。」

## 第十一話　く夏祭り編（後書き）

少し読みにくいとのことでしたので描写をがんばろうとしましたが  
なんか失敗した気がします。

なんつうか最後に「くです」、「くます」がつくとスピーディな描  
写ができないというか・・・これも言い訳なんですけどね。本当は  
俺の力量不足です。

とりあえず、夏祭り編はこれで終了です。

## 第十二話 くパーティー編

「．．．チエックメイト。」

「うわああ！．．．ひどい．．．ひどいですよ．．．」

「兄貴は作戦を練るのには長けてるかもしれないが．．．」

「凜のように当たって砕ける精神が無いと。」

「まあ、そういうことだな。」

どう白石秋斗です。

今、凜とチエスをしてました。

え？夏祭りはあの後どうなったかって？

普通に帰りましたよ。

作戦失敗ということぞ。

「しかし．．．当たって砕けるばかりじゃ勝てないですよ？」

「ふ．．．作戦を練ってばかりでも勝つことはできないぞ？」

「む．．．確かにそうですね。」

「さて、夕飯の用意でもするかな。」

「あ・・手伝いますよ。」

「本当か!？」

信じられない！というように僕に迫ってきます。

そんなに珍しいですか、僕が家事すること。

~~~~~

「それでは凜と！」

「秋斗の！」

「楽しいお料理ー！」

「……………何させるんですか。」

L

「いいじゃないか、盛り上がるだろ？」

「……僕のキャラってこんなだったけ？」

「兄貴のキャラは鬼畜で確定してるはずだぞ？」

「確かにそんなことも言っていましたね。」

鬼畜ですか……うん、確かに関野さんいじめるの楽しいけど……



そんなことを思いながらもたまねぎを切っていると・・・

「・・・兄貴、指切りそうになってる。」

「うお！？危ないじゃないですか！」

「私に言うな。」

まったく・・・ってあれ？

「なんで材料こんなにあるんですか？」

数えてみると・・・

「・・・5人分。こんなにいらないでしょう？」

「私が五人分食べるからだぞ？」

「いやいや、凜自分が小食なこと忘れてません？だいたい僕の方が無いし。」

「うるさい。」

「えええええ・・・。」

なんで僕いじられキャラになってんでしょう・・・

「鬼畜がいじめられるのっておかしくないですか？」

「私は兄貴以上の鬼畜だからだ。」

「ええええええ．．．．．」

凜がそんな性格だったなんて．．．

そんなことを考えていると．．．

ピンポン と、チャイムが鳴りました。

「お、来たか。」

そついつて凜が玄関まで小走りで行きました。

いや．．．誰が来たんですか？

「よお秋斗。」

キッチンに入ってきたそいつは．．．

「げ．．．鳥肌野郎さんですか。」

「鳥肌野郎ってなんだよ．．．だいたい俺の名字は鳥肌じゃなくて鳥原だつつつの！」

「とりがらさんだろ？」

「凜ちゃんまで．．．．ひどい．．．．」

「ははは、白石ジョークだ、なあ兄貴。」

「ははは、そうですね、鳥肌さん。」

「もういいよそれで」

## 第十二話。くパーティー編（後書き）

ブログにも来てね。

http://blogs.yahoo.co.jp/neeto  
n329

### 第十三話 くパーティ編

「ともかく、鳥肌野郎も手伝って下さい。」

「俺は招かれた方だぜ？客だよ客。」

「．．．うるさい。」

「凜はいつからそんなキャラになったんでしょうか？」

「はゝ、やればいいんだろやれば。」

しかし鳥肌さんはどうして神野さんのことを好きになったんでしょう？

確かに顔は良いけどあの性格は．．．いや、知らないんだったらしようがないけど。

そんなことを思いながらごぼつを切っていると．．．

「秋斗、指切りそうになってる。」

「．．．教えるのが遅いですよ。」

「いやいや感謝してしかるべきだろ！！」

．．．しかし、この調子だと絶対に関野さんと神野さんが来るでしょうね。

『招かれた』と鳥肌さんが言ってたので、凜が呼んだとは思えませんがね。

ピンポン

「お、次は誰だか気になるな、兄貴。」

「誰でも良いからとっとと出てやりなさい。」

凜は小走りで玄関まで走っていきました。

「こんにちは。うおー良い匂い。」

家来がやってきました。

あれ？部下だったっけ？

とりあえず関野さんです。

「・・・まだ野菜切ってる段階だから匂いとか分からないはずなんだけどな。」

「そういうことは気にしちゃいけないですよ鳥肌さん。」

「そうですね、こっついうのは気分ですよ。」

関野さんが来て・・・あとは神野さんですね。

・・・15分経過後。



凜が小走りで玄関まで走っていきます。

「あははははは！！確かにPとRは一本線付け加えるだけで変わるよね！！あははははは！！！」

「こんにちは、おじゃまします。」

どうやら神野さんが来たそうです。

「あははははは！神野ちゃんとかつけるんだけど！あははははははははは！」

「いい加減黙りなさい！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい。」

あれ？案外すぐに笑い終わりましたね・・・・まさかわざと？

「あははははは！私エビ天がいいな！あははははははは！！！」

「うるさいですよ！！！」

そう、今日のメニューは天ぷら。

「今日は天ぷらパーティーです！ってことで良いんですよね凜？」

「ああ、間違いない。」

「あははははは！エビ天エビ天！」





### 第十三話 くパーティー編（後書き）

あはははは！

ごめん、更新遅れた！

ああははははは！

ブログの方にも来てね。あはははははは！

<http://blogs.yahoo.co.jp/neeton329>

## 第十四話 くパーティー編

「エッビツ天！エッビツ天！あはははは！」

「ここは獅子唐が通だろ。」

「む．．．予想以上の人気だな．．．兄貴、もう一回揚げたほうがいいんじゃないか？」

「いや、大丈夫でしょう。」

確証はありませんが。

白石秋斗です。

いや、凜の作る天ぷらはおいしいですね。

サクサクしてて。

うーん、全部伝えるのは面倒なので要点だけ伝えましょう。

「サクサク凜おいしいです。」

「え？」

反応したのは鳥肌さん。

「おい、お前．．．凜ちゃんのことくったのか？！どんななんだった！？教えてくれよ、なあ、なあ！」

「そっちの食べるじゃないです。」

「……つまんねえの。」

落ち込む鳥肌さん。いや、落ち込みどころがよくわからない。

「兄貴はな、私が揚げた天ぷらはサクサクすぎてほっぺたが落ちちやったから拾ってくれ。と言いたいんだ。」

「おお、さすがは我が妹。なんか変なのも混じってたけどそういうことです。」

「なんか通じ合ってる感じだね。あはは！」

「いちいち笑うのをやめなさい！」

「だってピン口くんだよ？あはは！」

「まださっきのネタ引きずってますよこの娘。」

「しかし凜ちゃんって小学生なんでしょう？こんなにおいしいの作れるなんてすごいよね。」

「ありがとう神野さん。兄貴が全く家事をしないせいでいつの間にかうまくなっていたんだ。」

「……しかも買い物もだんだん主婦っぽくなってますよね。『この日が10パーセントオフの日なんだ。兄貴、荷物持ちを頼むぞ。』とか言ってる。」

「あはは、でも偉いよね。」

「私もそう思う。」

．．．神野さんと関野さんの違いが分からない？

しょうがないですね。

技を伝授しましょう。

語尾に『』がついてたりどこか壊れてる感があったら関野さんです。

壊れていなかったり、『あれ？こんなやつここにいたかな？』って思ったりしたら神野さんです。

ちなみに『あれ？こんなやつここにいたかな？』って思ったときは人格が変わっています。

パワーも無限大です。こええ．．．

ついでに言っておきますと、

凜を『メイドちゃん』と呼ぶのは関野さん。

『凜ちゃん』と呼ぶのは神野さんです。

分かりやすいでしょう？

「しかし本当だよなあ、関野ちゃんなんて料理できなさそうだよな。」

「む．．．余計なお世話ですよー!」

みんなで談笑していると．．．

ジーーーー．．．

ジーーーー．．．

視線、殺気。

「そこですっ!」

びしっ!指をさしました。

「うるさいぞ秋斗。」

「む．．．確かに殺気を感じたんですが．．．」

悩んでいると凜が耳を貸せ。とゼスチャーしています。

耳を貸すと．．．

「ふー。」

「っ!」

一瞬体をのけぞらせる僕。

「ちょっと、なんですか！」

「ははは、冗談だ。」

もう一度耳を貸せとのゼスチャー。

しょうがないですね．．．

『あれは殺気じゃなくて、気付いてほしただけだと思うぞ?』

『兄貴の言う、殺気の発信源は神野さんだ。多分、何か話したいんだと思うぞ?』

『もちろん、兄貴は私の嫁だから渡さないが。』

．．．最後の言葉は知らないふりで。

「なんですか、神野さん？」

「む．．．ばれてしまいましたか。」

「いや、ばれはれですけど。」

ずっとこっち見てるじゃん。

「少し話をしたいんですが．．．良いですか？」

席を立つ神野さん。

「良いですよ。」

ふふ、何もかも計画通りです。



## 第十五話 くパーティー編

「・・・・・・・・で？何の用ですか、神野さん？」

どうも。呼び出しくらった白石秋斗です。

説教でもされるんでしょうか？こわいこわい。

「えっと・・・・・・・・急なことで申し訳ないんですけど・・・・・・・・」

「はあ？」

控えめにしゃべりだした神野さん。

何か頼み事でしょうか、はてさて？

ふふ、まあだいたい予想はついているんですけどね。

「えっと・・・・・・・・」

「分かりました。当ててみせましょう。」

「え？」

「当ててみせます。」

「は・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「・・・・・・・・愛の・・・・・・・・告白ですね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・帰ります。」

「う、嘘ですよ。」

それでも玄関で靴を履こうとする神野さん。

はあ・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・鳥肌さん。」

「え？」

びっくりしたような顔で。

こっちを見上げて。

「鳥肌さんと、付き合いたい・・・・・・・・・・でしょうっ？」

口をぽかんと開けて。

首を傾げて。

「え．．．．．なんで．．．分かるんですか？」

「．．．無駄に長い間、仲人をしていたわけじゃないですよ。」

そう。

見れば分かりました。

行動。

言動。

表情。

「ちなみに『仲人』、『月下氷人』っていう別名もあるんですよ？  
なんかかつこいいですよねえ。」

「．．．．．」

どうでも良いまめ知識でした。失礼。

「まあとりあえず任務成功ってとこですね。」

「え？」

さらに首を傾げる神野さん。

「なんのことですか？」



KY大賞・・・・・・・・今ならもらえる気がします。

第十五話。くパーティ編（後書き）

悪いのは秋斗君じゃない。

鳥肌だあああああああああああああ！！

## 第十六話 くパーティ編

「おじゃましました。」

「おじゃましました。」

「じゃあな、秋斗。」

3人が僕らの家から出て行きました。

「はあ．．．なんか静かになったな、兄貴。」

「そうですね．．．」

あの後、僕は鳥肌さんに告げました。

『神野さんは、あなたのことが好きみたいですよ?』

『え．．．マジで?』

『マジマジ。好感度MAXですね。』

『．．．．．すげえな、人間関係の神様は。』

『は．．．まあ、結局はあなたがどうか、なんですよ?』

『はあ．．．』

『最後の仕事は．．．．あなたが遂げなくてはいけないんです。分かりますね？』

『分かってる。告白するのは、俺だっただろ？』

『ま、そういうことです。』

『ところで、僕たち、ってどういうことだ？』

『ああ、今回は関野さんも協力してるんですよ。』

『へえ、そうなのか。それより、サンキュな。今まで。』

『おやすい御用ですよ、この位。』

「．．．．で？とりがらさんたちは何か発展したのか？」

「ええ。大きく、前へ進んだはずですよ。」

「ふふ、そうか。じゃあ、晩ご飯の準備でもするかな．．．．」

晩ご飯？

天ぷらは？

．．．．．間食？



「さあ、今日は残りの天ぷらで天井だぞ？」

また天ぷらですか……

「はあ……なんであの後また揚げたんですか？」

「え？いや、だってな。自分が作った食べ物がみんなの胃袋に溜まっていくのは嬉しいことだろう？」

凜は笑顔……

でも、その溜めていく方のことも考えてほしいものですね。

「はあ……鳥肌さん、無理矢理食べてましたよ？」

「え？まあいいじゃないか。とりがらさんだし。」

「まあそうですね。鳥肌さんですからね。」

天井ですか、久しぶりですね。

「ちなみに私はエビ天メインだ。」

「え？僕のは？」

「獅子唐メインだ。」

「……………」

ふるふるふるふる。

「おお、兄貴が怒りに震えているぞ。」

獅子唐メインってきついですよね。

だつて．．．．ねえ？

「ごちそうさまでした。」

「ごちそうさまでした。」

行儀よく手を合わせます。

結局僕の天井にもエビ天ははいつていました。

獅子唐多かったけど。

「兄貴。」

「なんですか？」

「風呂にするか？もう寝るか？それともわた．．．．」

「お風呂にします。」

「ちっ。」

舌打ちしましたよこの娘。

「じゃ、じゃあ風呂入ってきますね。」

「ああ。」

「しかし……。」

湯船につかりながら考えます。

あの後、鳥肌さんと神野さんはどうなったんでしょう。

告白したんでしょうか……。

後日聞くとしましょうか。

## 第十六話 くパーティー編（後書き）

おっと！…このまま終わってしまうのか！？

．．．．．これってさ、まだまだ続くって言ってるのと同じだよな。

## 第十七話。く告白編

「おい、秋斗！どういうことだこれはあああああ！」

朝自分の教室に入ったらいきなり鳥肌さんに怒鳴られました。

白石秋斗です。

なんで怒鳴られたんでしょうか。

「お前なあ、俺がどれだけ勇気を振り絞ったと思って・・・」

「とりあえず落ち着きましょうよ、何があったんですか？」

「コクったら、フラれた。」

「・・・・・・・・・・え？なんですか？耳が遠くなったみたいなんですけど・・・」

「だから、コクったらフラれたんだって！」

「・・・・・・・・・・マジですか？」

「ああ、マジだ。」

なんででしょう？あのときのあの顔、間違いなかったはず。

いや、もしかしたら僕の問題発言によってその気が消え失せたとか？

いや、そんなはずはありません。あの後神野さんは笑って許してくれたんですから！

じゃあ何が原因なんでしょう？なぜ？僕の仕事が失敗したうわああああああああああ！！！！

「おーい、秋斗お？だいじょぶかあ？」

「はっ！」

いけない、僕としたことが取り乱してしまいました。

「こほん．．．．．で、どんな風にしてフラれたんですか」

「それがだな．．．劇的なツンデレでだな。まあ、あれはあれでありっていうか？」

「あゝそうですか、じゃあ任務終了ですね、ほら、報酬報酬。」

「終わってない終わってない！しかも報酬払うなんて聞いてねえよ！」

「ちえつ。」

なんだ、面倒なことに巻き込まれなくて済むと思ったんですけど．．．

「じゃああの時のことを説明するぞ。」

『・・・・・・・・神野ちゃん』

『はい?』

『好きだ!付き合ってくれ!』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『はあ?何言ってるの?キモ。こっち来んな。』

「・・・・・・・・・・夢でも見たんじゃないですか?」

「いや、そんなはずはないぞ?キモ。こっち来んな。って言いながら神野ちゃんが俺を殴った時痛み感じたし。」

「殴られたんですか。それは大したツンデレぶりです。」

「だろ?」

んゝ・・・・・・・・しかしあのときの神野さんはまさしく鳥肌さんのことを好きで・・・・・・・・

あれ?なんか忘れてるような。

神野さん . . . . 神野さん . . .

あ。

そうでした。

これまた面倒くさい設定があるんでしたね。

「鳥肌さんは知らないだろうから教えておきます。」

「何を？」

「神野さんはですね、多重人格者なんですよ。」



第十七話。く告白編（後書き）

ははは、まだまだ続きそうですねく（なぜ他人事？

## 第十八話　く告白編

「ただいまー。」

やあみんな。元気かい？

誰だよ。とつっこみをいれた方。

勉強不足だね。

「お帰り兄貴。」

「やあ、ただいま。」

「なぜ気さくな兄を装っているんだ？」

「イメチェンってやつさ。」

「やめとけ混乱するから。」

「……つまらないですね。」

改めましてこんにちは、白石秋斗です。

「で？なぜ急にイメチェンなんだ？」

「いや、多重人格者の感覚を味わえるかなと。」

「できるわけないだろ！」

しかし、多重人格者だなんてケースは初めてなんですよね。

これからどうしましょう。

「どうしたんだ、難しい顔をして。」

「いや、神野さんがですね。」

「ああ。」

「多重人格者だったじゃないですか」

「そうだな。」

「鳥肌さんが告白した時、ちょうど人格が入れ替わり、告白失敗になっただけなんですよ。」

「そんなことありえるのか。」

「ありえるそうですね。」

何やら凜が考え始めました。

そして、何秒か後「あ、思いついた！」みたいな顔をしました。

「全部の人格がとりがらさんを好きになれば良いんじゃないか！」

「……………」

「なんでそこで『えー、めんどーい』みたいな顔をする？」

「そこまで面倒見きれませんよ。」

「確かにそうかもな、だががんばれ！」

無責任な。

「それじゃあ、夕飯の用意でもするか。」

てくてくと去っていく凜。

この世は無情です。

『全部の人格が鳥肌さんを好きになれば良い。』

確かに一番確かな方法ですよね。

しょうがないですねえ、やりますか。

.....

プルルルルル

プルルルルル

「はい鳥」「肌です。」

「.....勝手に人の名前を変えるな！」

「まあまあ、落ち着いてください鳥肌さん。」

「はあ、全く。何の用だよ？」

「神野さんとカップル、もしくはそれ以上のいやーんな関係やあつはんうつふんな関係になる方法を思いついたんです！」

「なあ、その言い方さ、自分が恥ずかしくなるからやめてくれ。」

「自分の言葉には責任を持ちなさい。」

「変なことに責任を持たせるなあ！」

「それですね、そのナイスアイディアは僕のかわいい妹、凜が思いついたんです。」

「お前シスコンだったのか？」

「とんでもないです！それは作者です！作者に妹いないけど。」

「脳内妹ってやつか！」

うるさい！とつと話を進めなさい！（神の声

「まあ、そのナイスアイディアというのがですね、全部の人格が鳥肌さんを好きになれば良い。というものです。」

「え——————。」

「なんでそう面倒くさそうな声を出すんですか、面倒くさいのは僕

の方ですよ。」

「そっか、じゃあ頼んだぞじゃな。」

ぶーー

無理矢理切りやがりました。

鳥肌野郎め。

．．．．．はあ、やりますか。

## 第十八話。く告白編（後書き）

あけましておめでとうございます！  
更新が滞ってしまいすみませんでした。  
すこし出かけてたもんで・・・  
今年もよろしく願います。

## 第十九話 く告白編

それからというもの、鳥肌さんは神野さんにアプローチ、告白の繰り返しでした。

一人目は、鳥肌さんのいう『ツンデレ神野』さん。

二人目は、『鳥肌さんをシモベ呼ばわりしていた神野』さん。

そして最後はあの、凜を吹っ飛ばした、『ストロング神野』さんでした。

今は『ストロング神野』さんに告白するための特訓中でした。

「ちきしょー、何が悲しくて腕立て50回3セットやんなきゃいけないんだよ。」

ひよいひよい

鳥肌さんは涙目でした。

「か弱いですよ鳥肌さん。そんなだからチキン肌って呼ばれるんですよ……あ、今僕つまいこと言いましたよね?」

ひよいひよい



「全然言ってない。」

ひよいひよい

「えー、結構センスよかったと思うんですけどねー」

ひよいひよい

「しかしお前さ、そんなに力あったのか？」

ひよいひよい

「ボディガードになることがあるかなーって考えていたらこんなに。」

」

ひよいひよい

「だからって逆立ち腕立てはおかしいだろおおおおおおおお  
おおお！！」

さつきからひよいひよい言っただのは僕の腕立ての擬音です。

ひよいひよい

「鳥肌さん顔真っ赤ですよ？」

ひよいひよい

「それは、逆立ちしてるからだっ！なんで俺まで逆立ちせなあかん

ねん！」

なぜか関西弁な鳥肌さん。

ひょいひょい

ばっ！

すた！

「ふう、疲れましたね。休みましょうか。」

「お、おう。」

ばっ！

どてっ！

「いたっ！」

不時着した鳥肌さん。

ださいです。

「しかし、ここんところ大変だったよな。」

「そうですねえ。」

本当に大変でした。

鳥肌さんの手伝いをしたり鳥肌さんの手伝いをしたり鳥肌さんの手伝いをしたり．．．．．

「．．．．．」

「う、秋斗が鬱っぽくなってる．．．」

「はあ。一人目は『あんたなんて鏡見ながら自分に告白してるが良いわっ!』ってナルシストになれみたいなこと言うし。」

「あれは本当に良いツンデレだったな。」

良くないですよ。

一番時間がかかったのはあの人格のときでした。

ツンデレへの対処法なんてコツコツやっていくしかないですから。

「．．．．．」

「う、秋斗がまた鬱っぽくなってる．．．」

「はあ。二人目は『シモベの癖にうぬぼれるんじゃない』って言うし。」

「うん、あれは本当に良い姫様だったな。」

良くないですよ。

一番頭に來たのはあの人格のときでした。

時間もかなりかかったし。

「……………」

「また秋斗が鬱っぽく!」

「はあ。三人目は『自分より強くない奴には興味ない』って言うし。」

「うん、あれは本当に良い武道家だな。」

良くないですよ。

一番疲れるのは多分あの人格でしょう。

鳥肌さんは力無いし。

「よし、始めますよ!」

「え…………休憩少くないか?」

「甘ったれるな!歯を食いしばれえ!」

「おっす!!!」。

第十九話　く告白編（後書き）

ちよつと飛ばしました。

なんかバトル小説になりそうなヨカン・・・

## 第二十話　く告白編

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

ばっばっばっばっばっばっばっばっ！！！

シュッ！

スタ！

「おお〜！」

パチパチパチ！

「ふん、俺からしたらこんなこと・・・ちよいもんだぜ。」

どうも、白石秋斗です！

今鳥肌が逆立ち腕立てをマスターしました！

時間をかけたかいがあり・・・

ボタン！！

「大変です白石先輩！！」

関野さんが入ってきました。

あれ？鍵しめたはずなのに。

「どうしたんですか我が子分よ。」

「子分じゃないです!!」

どうもかなり慌ててますね。

「笹川先輩が神野ちゃんと付き合ってるっていう情報が流れているです!!」

「……………え？」

「……………は？」

「確かめてきます!!」

「ちょ、おい? 秋斗!？」

学校までダッシュです!

今ならまだ下校中の生徒はたくさんいるはず!

「はあはあ……………」

着きました…………

お、ちょうど女子生徒が通りかかりました!

「ちょっとその人！」

「は、はい？」

「笹川さんについて何か知ってませんか？」

「あ、あゝ、神野さんと付き合っているとか噂がながれてますよ．．  
」。

「いま笹川さんはどこにいますか！」

「教室で友達としゃべってると思いますよ．．．」

「ありがとうございます！」

教室までDASHです！

「はあはあ．．．コホツコホツ」

着きました．．．

「笹川さん！」

びつくりする笹川さんとその周りの友達たち。

「あれ？白石君じゃあないか。どうしたんだい？」

笹川京介。



顔よし頭よし運動神経よし。

女子に対する性格は良くモテモテのこの人。

この人と神野さんが？

「ちょっと聞きたいことがあるんです。」

「なんだい？」

「あ、えーと他の人は聞かないでおいてもらえますか？」

返事をしながら教室を去っていく笹川さんの友達たち。

「神野さんと付き合っているという話ですが？」

「ああ。そのことか。それは別に本当のことではないよ。」

なるほど。やはりデマでしたか。

「ちょうど良かった。聞きたいことがあったんでね。」

「はい、なんででしょうか？」

「神野さんはどういう人なんだい？すこし気になっていてね。」

はあ。

「えー……多重人格者で現在確認できている人格は三種類。付き

合つまではかなり時間がかかるでしょうね。」

すると笹川さんは

「．．．へえ。じゃ、いつか。」

そんなことを言いました。

じゃ、いつか？

「じゃ、いつか。ってどういふことですか」

「気になっていたけどやっぱりどうでも良くなったよ。」

どうしても、良く？

その瞬間僕の中の何かが切れました。

「あなたは．．．」

「ん？」

「あなたは一人の人を愛することもできないんですか？」

「ふっ．．．面倒なだけじゃないか。」

「面倒．．．あなたなんか神野さんと釣り合つわけが無いですね。」

「どういふことだ」

「先客がいるんですよ。その人はあなたなんかよりもずっと強い。違う人格の神野さんのことすら好きになり付き合ったために必死に毎日頑張っている。それがあなたには真似できますか？断言しますよ、できません。」

「分かったから帰ってくれ。」

「.....」

僕としたことがつい熱くなってしまいました。

「早く帰ってくれ。」

そして翌日、事件が起きました。

## 第二十話 く告白編（後書き）

続きます。

・ ・ ・ 当たり前だけど。

## 第二十一話　く激闘編

「．．．あれ？」

10時45分。

今日は休みだから良いものの、いつもなら凜が起こしにきてくれるはずなのに。

あ、おはようございます。白石秋斗です。

とりあえず下におりましょう。

「おはようございます．．．」

いないですね。

とりあえず麦茶を一気飲みして．．．

ぐびっぐびっ

つぶは〜！

．．．え？親父みたい？

「凜〜？」

すると、テーブルの上に手紙を発見しました。

「置き手紙ですか。どれどれ．．．」

『関野さんが行方不明だ。起きたらとりがらさんの家に来てくれ。』

「．．．．．」

え？何？子分が行方不明？

ちょ、え？いやなんでですか？

あれ？もう一枚手紙が．．．

「どれどれ．．．」

『関野由利香を返してほしくば学校の体育倉庫裏へ来い。』

え？拉致ですか？

ていうか誰がこの手紙を．．．

どうしてうちには入れたのでしょうか？

ていうかなんで僕の家？

普通家族のところだと思っんですけど・・・

とりあえず鳥肌さんちに急がなくては！

いや、その前に着替えなくては！

「あれ、鍵がないですね・・・まあここの辺の住民は基本いい人だから良いですね。」

「はあはあ・・・ゲホッゲホッ！鳥肌さん！」

「おう、秋斗か。遅いぞ。」

「すみません。」

そこにいるメンバーは鳥肌さん、凜、神野さん。

「それよりこれ。」

もう一枚の方の手紙を差し出しました。

「お？場所が書いてあるじゃねえか。」

「はい。でもいったい誰が・・・。」

あれ？そういえば出てきた時鍵が開いていたような。

「鍵はしめて出て行きましたか？」

「ああ、知らなかったのか？ 鍵、壊れていたんだぞ。そんなこと言ったら兄貴も鍵をしめてないだろ。」

「いや、鍵が無かったからしめてきませんでしたけど．．．知らないですよそんなこと。」

「だってこないだ関野さんがチャイム押さずに入ってきただろ？」

「え？ あああああああああああああああ！！！」

そつえばそうでした！これで一つなぞが解けました！

「うるさいぞ秋斗。」

「うるさいぞ兄貴。」

「うるさいですよ白石先輩。」

「すみません。」

そして．．．

「行きましようか、相棒を助けに。」

「そうだな。」

「よっしゃ！行くぞー！！！」



「行きましょう！」

四人で、もう一人を捜すために。

いつもの五人で笑っていられるように。

学校の体育倉庫裏。

そこまで。

そこまでは四人で。

そして、帰りは五人になっているように。

願いながら。

祈りながら。

今出発です！

「な、その前に飲みもん買ってかね？」

「．．．．．あなたは．．．．．空気を読めない人間ですね  
！！」

げしげし！

「悪かった！悪かったからみんなで踏むとかやめて！汚いから！」

．．．．．

「．．．．ふう。」

「なに『やりきったぜ』みたいな顔してんだよ！」

「行きましょうか！」

「よし、行こう。」

今度こそ出発です！

にしても鳥肌さん．．．．空気読めない子！

## 第二十一話。く激闘編（後書き）

やばい！鳥肌さん．．．恐ろしい子！（なにが  
なんかね、こう．．．．．

小説書いてーーーーー！

ていうエナジーが！エネルギーが！

パワーがああああああああ！！！！

キタアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアア！！！！

．．．．．なんでこんなハイテンションなんでしょう。

まあいいや。とりあえず謎だらけですが次回もよろしく！

関野さんの下の名前は由利香です！

## 第二十二話　く激闘編

学校の体育倉庫裏からこんにちは。

白石秋斗です。

「ようやく来たのか。」

そこに立っていた人物は．．．笹川さんでした。

その後ろにはロープで縛られた関野さん。

「どうしてあなたがこんなことを？」

「仕返し。」

ぶっきらぼうに答える笹川さん。

「まあそれはどうでも良いですけど、あなたにそういう趣味があったとは。」

挑発を始めます。

すると向こうは簡単に挑発にのりました。

「これは動かないようにするためだ！」

「．．．そういうプレイですか。」

「違う！これはここから逃げられないようにするために！」

「ああ、なるほど。そういうプレイですか。」

すると、笹川さんが舌打ちしました。

うん、挑発成功です。

「てめえ！」

鉄パイプを持ち殴り掛ってくる笹川さん。

なんでそんな危険な物が学校にあるんですか全く。

あっという間に鉄パイプは僕の頭上に。

しゃがむと頭上でパイプが空を切りました。

「甘いですよ。」

「ちっ」

僕はそこから下がり、間合いをとりました。

そして懷から『それ』を出しました。

「はい、ポーズ！」

「！-！」

僕が持っていたのは証拠写真を撮る時用のカメラでした。

僕がシャッターを切ると相手は目をくらましました。

「．．．．鳥肌さん、後は頼みましたよ。」

「おう！」

それまで下がっていた鳥肌さんと場所を入れ替わりました。

「いくぜ！」

鳥肌さんが走り、相手の目の前でしゃがみ込み、全身のバネを使ってみぞおちに拳を突き出しました。

その瞬間僕も走り出しました。

手には護身用のナイフ。

そのまま関野さんのところまで走ると、ロープを切りました。

「あ、ありがとうございます。」

「礼はいりませんよ。」

頬を赤くする関野さん。

ん？熱でもあるんでしょうか。

ピタッと関野さんの額に手をやるとさらに赤くなりました。

「う．．．．．せ、セクハラで訴えますよ?」

「これだけでセクハラになるんですか、ああ、この日本ももう終わりですね。」

と、お話はこれくらいにして。

そろそろ鳥肌さんを助けに行かなくては。

「それじゃ。」

くるりと背を返して相手に向かいました。

あれ? いない。

そこにいたのは神野さんと鳥肌さんだけでした。

「あれ? 笹川さんは?」

「ああ、そこに倒れているぞ。」

あ、本当だ。

つまらないですねえ。

「僕に華を持たせるっていう考えはないんですか?」

「ない。」

即答ですか。

そしてその隣にいる神野さんは、頬を赤く染め鳥肌さんを見つめていました。

あー、今インフルエンザ流行ってるんですね。

ていう冗談はこれくらいにして。

「鳥肌、と言ったか。」

あれ・・・まさか例のストロング神野さん？

「ん？どうした？」

「あ、あの、そのだな。」

「？」

はあ、疎いですね鳥肌さん。

「お付き合い願いたい！」

キタ――――――

――！！！！！！

やっと、待ちわびたこの瞬間がきました！！！！！！

さあ鳥肌さん！はい。と答えなさい！



「俺で、良いのか？」

「ああ。」

「じゃあ、喜んで。」

微笑む鳥肌さんと神野さん！

キタアアアアアアアアアアアア！！！！！！！

「良かったですね。」

と関野さん。

「ほんとですよ。これまで頑張つて来た甲斐があるってもんです。」

「どうか、食事に行きませんか？」

「いいですね。じゃ、行きましょうか。」

そして、二人を残し僕は昼食を食べにいくのでした。

完。

## 第二十二話。く激闘編（後書き）

まだ終わりませんよ!?

エピソードまでお付き合い願いたい!

あれ? . . . . . 誰か忘れてませんか?

## エピソード。〜激闘編

ここは某ファミリーストラン。

どうも、前回『完』とか言っときながらまた登場した白石秋斗です。

「関野さん、良く無事でしたね。」

「まあ私に危害を加える気は無かったっぽいですから。」

なるほど。

じゃあなぜ笹川さんは関野さんを？

「白石さんはなんで私がさらわれたことを知っていたんですか？」

「え？そうですね・・・。」

朝起きたら手紙が置いてあったこと、実は鍵が壊れていたことなどを話しました。

「でも・・・白石さんが助けに来てくれて良かったです。」

「そうですか。まあ笹川さんを倒したのは鳥肌さんですけど。」

「そういう問題じゃないですよ。白石さんが助けてくれた、それだけで嬉しいんです。」

「そうですか。しかしなんで笹川さんは僕の家の手紙を？」

「本人曰く、白石さんの一番大切な人の……………あ。」

ん？

一番大切？

「う、あの、えと……………」

「……………？」

首を傾げてみました。

「いや、あの…その……………」

ふう、関野さんは面白いですね。

そんな行動されたら誰だって気付くはずなのに。

「はい、ポーズ。」

カシャ。

「……………え？え？」

「ふふふふ、くつくつく……………ぷぷっ」

「えと、白石さん？」

「あー、関野さんかわいすぎ。」

「え？う……………」

みるみる頬を赤くしていく関野さん。

「関野さん。」

「は、はい……………」

「証拠は、この手の中に。……………ぶぶづ。」

手の中のカメラを見せる僕。

「お勘定は頼みますよ〜！」

「ちょ！え〜、白石さん！！！」

そして僕は、ファミレスを出ました。

「ふう。」

え？なんで出て来たのかった？

いや、ちょっと気になることがあるんです。

「着きました〜」

そこは、学校の体育倉庫裏。

そこにはもう鳥肌さんと神野さんの姿はありませんでした。

うーん、今頃カップル以上のいやーんな関係やあっはんうつふんな関係になるうとしていているところなんでしょうか？

そんなことはどうでもいいんですけどね。

「笹川さん。」

まだ倒れていた笹川さんに話しかけました。

「はぁ．．．なんだい？」

「鳥肌さんの戦法、どんなでした？僕見れなくて残念なんですけど。」

すると彼は、僕から目を背けてこう言いました。

「ああ、弱いと思っていたあいつがあんなに強かったとはな。」

「はは、強かったんじゃないよ、強くなっただけです。」

「先客っていうのは彼のことだったのか？」

「そうですよ。」

そう言うと彼は全てを諦め、そして認めたような顔で笑いました。

「はは、彼には敵わないよ。」

「でしょうね。」

ちよつとした、沈黙。

先に言葉を發したのは僕の方でした。

「なぜ、僕の家の手紙を？」

「ああ、話さなくちゃね。」

そして、彼は空を見て話し始めました。

「僕に対して君は、『あなたは一人の人を愛することもできないんですか？』、そう言ったよね。僕は昔彼女がいたんだ。その娘だけが僕の生き甲斐と言つても過言ではなかった。ずっとその娘だけを見てきた気がする。でも、彼女は僕にこう言つたんだ、『ごめんなさい、他に好きな人ができたの』って。」

彼は悲しそうに話し続けました。

「その後、その娘は転校してしまった。今じゃ連絡を取ることすら叶わない。そんな僕に君が投げかけた言葉はそれはひどいものだ。たさ。僕は思つたんだ、復讐してやろうって。大切な人がいなくなる気持ちを分かせてやろうって。」

そんなことを話しながらも彼の目には僕に対する敵対心は全く見えませんでした。

「関野由利香。この娘は君のことをずっと好きだったんだ。でも君

はそれに気付いている様子が全くなかった。僕にとっては丁度良かった。僕は彼女をさらった。それが罪になることを知っていたけども、そうせずにはいられなかった。」

彼の目が、ふいに僕の方に向きました。

「君は、気付いていたのか？彼女が君のことを好きだと言うことを。」

「とつくのとうに、知ってますよそんなこと。」

「なぜ、放っておいた？彼女がかわいそうだと思わないのか？」

彼はそんな言葉を投げかけてきました。

「僕は、自分が楽しければそれで良い人間なんですよ。」

「嘘付け。」

彼は笑いました。

「じゃあなぜ君は彼女を助けにきた？」

その問いに、僕は微笑んでこう言いました。

「彼女といることが、僕の、楽しいことだからですよ。」



## エピソード。ゝ激闘編（後書き）

これで一応終了です。

できれば後書きまでお付き合い下さい。

後書き。小説と凛と作者について（前書き）

¥（^o^）／後書き¥（^o^）／

## 後書き。小説と凛と作者について

「兄貴、絶対に私のこと忘れてたな。」

私は白石凛と言う。

お見知り置きを。

え？もうこの小説は終わりだって？

チクショウなんて鬼畜な作者だ。

ちなみにここからは作者も登場人物もない。

世界観ぶちこわしでお送りする後書きのようなものである。

．．．さて、今回の作品お楽しみいただけただろうか。

作者側としては不安でたまらないらしい。

まあ初の連載小説だし、しょうがないことかもしれないが。

今回のコンセプトは

『告白する人、される人。いつもその傍らにいるような、仲人が主人公の物語。』

だったそうだが今考えてみると兄貴や関野さんはそれほど活躍していない気がする。

さらにとりがらさんもそこまで活躍していない。

じゃあ誰が一番活躍したのだろうか。

作者的には最後の最後で話を盛り上げた笹川さんだと思っている。

確かにそれは的をえている。

さらに作者、昔ーというよりも夏祭り編の終わりのあたりまで、読み返してみたらしい。

感想は、『読みにくい。』だそうだ。

ここらへんは本当に読者削減の元になっているに違いない。

本来なら、第一話で読者の心をつちりつかみ、後は適当にーげふんげふん。

つまり、見苦しい文章を読ませてしまったことをかなり後悔している。

『ダメダメ初心者作者』というレッテルを貼られているかもしれない。

こうなったらはっきり言っておしまいである。

最近掲載されたお話の欄を見て『にーとん先生』があっても『あ、この駄目駄目初心者作家か。』と言って見て見ぬ振りをされてしまいかもしれない。

ところで、作者の今後の活動についてだが一応『受験生』であるため受験が終わるまでは現れないと思う。

これで思い切って勉強できるというわけである。

しかしパソコンは多分毎日やっている。

こんなんだから『にーとん』なのだ。

なので自分より何つつつつつつつつつつつつつつつつつつ倍もつまり作者の作品を見て感想を残すことは変わらないはずである。

ところで実は最初、私、白石凜は存在しなかったはずの人物である。単に作者の『妹が足りねえ。』という気持ちで作られた人物なのだ。

多分、妹が生まれてくるのをかなり楽しみにして待っていたのに生意気な弟が生まれてきたせいであると言えよう。

『妹になってあげても良いよ』と言う方は速攻で作者に連絡を取ってほしい。

必ず食いついてくるはずである。

しかしながら完璧に『そういう人』なのでやめておいた方がいいかも知れない。

さて、知っている人は知っているはずだが作者はブログをやっている。

下の方にある混沌重力というリンクがそうである。

ここでは作者のどーでも良い日常を垣間見ることと小説の更新情報を見ることができる。

良ければ来てほしい。

まあ携帯だと入れない人もいるようだが。

そんなことを書いているうちに文字数が1000文字を超えている。

そろそろさようならの時間である。

最後に

学校で小説のネタをくれた人

ネット内で小説のネタをくれた人

そして完読、そしてご愛読してくれた皆さん

に感謝をして、この場を締めたいと思う。

それではまた会う日まで。

みなさん、ありがとうございました！

## 後書き。小説と凛と作者について（後書き）

¥（^o^）／後書きの後書き¥（^o^）／

終わっちゃったあああああああああ！（おい

長かった・・・でも短かった・・・

とにかく初の連載小説でした。

はつきり言って受験ってことで『うおやばい終わらせなきゃくあw

せdrftgyふじこ1p:@:「」って感じでパニクリ、

結構強引に終わりに持っていきました。（そういうこと言っちゃ駄

目えええ！

はい、ご愛読ありがとうございました。

またの機会がありましたら他の小説も読んでもらえると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2324f/>

---

告白は激闘だ。

2010年12月21日16時15分発行